２０２２年度３年次編入学入試問題

人文学（出題意図及び解答）

（法文学部　言語文化学科）

問１　文章中の表現の意味を，文脈に即して正しく説明できるかどうかを問う問題です。

【解答例】どれほど人間と変わらぬ心があるように感じられても，相手が人間の作ったロボットであると分かったとたんに，そんな相手に心が宿っているはずがないと思うこと。

問２　文章中の表現の意味を，文脈に即して正しく説明できるかどうかを問う問題です。

【解答例】心があることの証拠を提示することができないという点では，人間とロボットのあいだに違いはない，ということ。

問３　文章中の表現の意味を，文脈に即して正しく説明できるかどうかを問う問題です。

【解答例】自分にとって全くの赤の他人である人の気持ちを想像しようとしても，他人になりかわった自分の気持ちを想像することしかできず，他人であると同時に自分であるような人がいる，という矛盾を含んだ想像になってしまうから。

問４　文章中の複数の表現の意味をその相違に照らして正しく説明できるかどうか，および文章中で筆者が提示している議論に対する自らの考えをどれほど論理的に展開できるかを問う問題です。

【解答例】何かを「信じる」というのは，自分がどう見なすかということに先だってそれがあらかじめ事実として成り立っていると思うということである。それとは逆に，何かを「創る」というのは，それがあらかじめ事実であるかどうかということとは別に，事実であるという態度を取るということである。

「人間が他人の心を「創る」のだ」という筆者の主張に，私は同意できない。なぜならこの主張は，筆者が提示している根拠によっては立証されていないと考えられるからだ。筆者によれば，他人の心の中を想像することは論理的矛盾を含むがゆえに不可能である。しかし仮にそのとおりだとしても，だからといって，他人の心の有無に関して，信じたり疑ったりできるような「事実」がない，とは言えないのではないだろうか。例えば，「自分が死んで存在しなくなった後の世界」を矛盾なく想像することは不可能かもしれない。どのような世界を想像したとしても，その世界を何らかの仕方で「見ている」自分がどこかに登場してしまうからだ。しかし，だからといって，「自分が死んで存在しなくなった後の世界」に関して当人の「態度」とは独立の「事実」はない，とは言えないはずである。仮に想像することができないとしても，自分が死んで存在しなくなった後に世界が何らかの形で存在し続けるのは間違いないからだ。したがって，筆者の主張に反して，他人の心の有無は「信じる」ことの対象だと考える余地があるように思われる。